

スポーツ・文化部会の取組と今後の方向性

1 令和6年度の主な取組

1 パラアート推進事業

①「パラアート・ミーティング」

概要：障害のある人もない人も共に文化芸術活動に取り組むことのできる環境づくりを進めるため、パラアートに取り組んでいる方や関心のある方同士の情報交換や交流を促進する。

時期：①令和7年2月19日 ②令和7年3月19日

成果：研修により、パラアート関係者が抱える課題を学ぶとともに
目標 様々な事例の共有や関係者同士の交流を促進する。



パラアートミーティングの様子(R5)

②「Colorsかわさき展」

概要：障害の有無にかかわらず、作品の魅力を伝える絵画展

成果：AIの技術を活用するなど、障害のある人もない人も共に文化芸術活動に取り組むことのできる環境づくりを進めることができた。（出展数200点、入場者数1,470名）

③「パラアート推進公募事業」

概要：障害者等を対象に文化事業を行う団体を公募、選考のうえ、事業を委託して実施する。

成果：初事業として4事業、継続事業として2事業を委託し、市民に音楽等をおとした体験の機会を提供できた。

2 東京交響楽団市内巡回公演

概要：本市のファンチャイズオーケストラ東京交響楽団のメンバーがホール等に足を運ぶことが困難な市民にプロの演奏家の良質な音楽を鑑賞する機会を創出するため、巡回公演を行う。

時期：令和6年5月29日、11月19日、11月20日、12月12日、
令和7年1月21日、1月27日、2月9日

対象：障害者施設、児童養護施設、病院、特養老人ホーム、子ども食堂等

成果：対象施設の要望や特性に応じて、参加者が歌ったりリズムをとったりできる曲を演奏することにより、多くの市民に身近に文化芸術に触れる機会を提供することができた。



病院での公演の様子

レガシー⑤誰もが文化芸術に親しんでいるまち

3 インクルーシブ音楽プロジェクト

概要：音楽などを通じて多様性や包摂性など、「かわさきパラムーブメント」の世界観を楽しみながら感じられる各種取組を実施する。

時期：令和6年度中

対象：市民、学校・施設、音楽関係者など

成果：ワークショップ(20回)、音楽ライブ(2回)、人材育成講座(5回)を開催し、約6,000人が参加し共生社会の実現に向けた象徴的な取組となった。

アドバイザーの活用：河合千佳氏（特定非営利活動法人アートネットワーク・ジャパン 副理事長）

川村美紗氏（神奈川県障害者芸術文化活動支援センター）

中西麻友氏（特定非営利活動法人芸術家と子どもたち 事務局長）

アドバイザーの主な意見（11/20西菅小(河合氏)、12/9柿生小(川村氏)、12/16小田小(中西氏)）：

- ・音楽家だけでパラムーブメントの要素をプログラムに落とし込むのは難しい。主催者・音楽家・学校、双方の言語を翻訳してお互いをつなげたり助言ができるようなコーディネーター的な人材の導入も有効ではないか。
- ・複数回プログラムの導入など、もう少し会場ごとに質を深めていくような工夫も必要ではないか。

⇒意見・提案等を踏まえた取組の検討・実施

NEW

4 アートコミュニティ形成プロジェクト「こと！こと？かわさき」

概要：東京藝術大学と連携し、アートを介してコミュニティを育み、「対話のある社会」、「多様性が尊重される社会」、「孤立しない社会」に向けた取組を推進。アートコミュニケータ※「ことラー」が活動に必要な基礎を講座などで学んだ後、市域でプログラムや活動を展開していく。

※アートを介してコミュニケーション(こと)を起こす活動をする人々（R6:40名）

時期：令和6年度中

成果：障害のある方を含む40名の「ことラー」が参加する各種講座やプログラムの実施。

①基礎講座 6回

②実践講座 3コース各6回程度実施
（内1コースはケア実践講座）

字幕や手話を入れたフォーラムの開催
「Colors展」と連携した鑑賞会の開催
など、障害のあるなしにこだわることなく参加できる機会を提供した。



ケア実践講座

〔庁舎内カームダウン・ワーク
ルダウンスペースの見学〕



Colors展での
対話型鑑賞の様子



インクルーシブ音楽ライブ
いろいろねいろJAM2024

スポーツ・文化部会の取組と今後の方向性

レガシー⑤誰もが文化芸術に親しんでいるまち

5 区の取組

①はぴ☆こん〜誰もが幸せになるコンサート〜の開催（幸区）

概要：お互いを理解・尊重し、多様性を受け入れる「心のバリアフリー」を進めることを目的として年齢や障害の有無に関わらず、誰もが気軽に様々な音楽を楽しめる観覧無料のコンサートを開催する。

時期：令和6年11月10日（日）

対象：どなたでも

成果：今年度は、インクルーシブ音楽プロジェクト「いろいろないろ」と連携して開催（参加者約200名）

また、田島支援学校や川崎市立幸高校とも連携を図り、多様な主体が様々なかたちで関わり、多様性を体現する音楽イベントとなった。



出演者による演奏の様子

②しあわせを呼ぶコンサートの開催（宮前区）

概要：音楽を通して障害のある方もない方も、出演者も観客も一体になってステージを作り上げ、お互い理解を深め合うことを目的として実施する。宮前障害者施設・作業所連絡会の利用者による原語での第九の合唱や施設等で製作した物品等の販売を行う。

時期：令和6年9月11日（水）

対象：どなたでも

成果：宮前障害者施設・作業所連絡会の9施設54名のみなさんが舞台上で第九を原語で合唱し、観客との交流と相互理解を深めた。



合唱風景

6 アドバイザーを活用した取組

概要：かわさきパラムーブメントの掲げるレガシー実現のため、各部会における具体的な取組推進にあたり、各分野の有識者から意見を聴取することで、外部からの先進的な知見を活用し、課題解決や新たなアイデアの創出につなげる。

視察事業：第2回しあわせを呼ぶコンサート

時期：令和6年9月11日（水）

アドバイザー：小川 智紀氏（神奈川県障害者芸術文化活動支援センター 理事長）
萩原 利昌氏（NPO法人川崎市障害福祉施設事業協会 理事長）

【アドバイザーの主な意見】

- ・「誰に向けて何を届けたいのか」という議論が不足しているように感じた。ポイントはあくまで合唱練習のプロセスであり、合唱の中で障害者が何を感じたか、また、障害者や施設職員、合唱の専門家がどのような思いで関わっていたのかといった声を、イベントにおいて何らか示すべきである。
- ・コンサートの主体である障害者の反応を適切に確認し、フィードバックすることが重要である。とりわけ、当該反応については、関係者の主観による単なる感想でなく、「笑顔があった」、「集中できていた」、「拒否がなかった」など事実の積み上げの中で推論していくべきである。
 - ⇒意見を取りまとめ、部会構成員と共有した。
 - ⇒各所属において意見・提案等を踏まえた取組の検討・実施

2 令和7年度の取組の方向性

■現在の状況

◎「令和6年度かわさきパラムーブメント意識調査」の結果では、社会的マイノリティが文化芸術に携わる、鑑賞する際にバリアがあると感じている人の割合は、令和5年度調査に比べ2.5ポイント上昇している。

※バリアを感じている方の割合 令和6年度調査：49.5%（令和5年度調査：47.0%）

■方向性

・意識調査では令和5年度からバリアがあると感じている人の割合が減っていないことから、引き続き、改善に向け取組を進めていく必要がある。文化芸術活動が障害者の社会参加を促進する有力なツールの一つであることを認識し、障害の有無に関わらずインクルーシブな環境としていくことを目指し、障害者みずからが文化芸術活動を行う＝「する」と、鑑賞する＝「見る」の両面で取り組んでいく。

3 市民等の意見聴取

令和6年度のアドバイザーからの意見を既存事業に可能な範囲で取り入れ、令和7年度については、幸区の事業をアドバイザーに視察・助言をいただき、課題解決や新たなアイデアの創出につなげるなど、パラムーブメント推進に向けアドバイザーを効果的に活用する。

【想定アドバイザー】

- ・小川 智紀氏（神奈川県障害者芸術文化活動支援センター 理事長）
- ・西野 博之氏（NPO法人フリースペースたまりば 理事長）